

中国のほんの話(61)

## 土岐善麿『UGUISU NO TAMAGO (鶯の卵)』

～ 日本訳詩史の上で記念すべき中国詞華集 ～

蔭山 達弥

漢詩の日本語訳については佐藤春夫の『車塵集』（昭和4年9月、武蔵野書院）がとくに有名であるが、それより三年前、大正14年（1925）1月にアルス社から出た土岐善麿の『UGUISU NO TAMAGO (鶯の卵)』は『車塵集』と共に、中国詞華集としては質量ともに抜群、まさしく双璧とも称すべき代表作である。

両集に共通する特色は、その訳風が雅語系の七五調および五七調を多く用いていること、また訓読という野暮な仲介は借りず、原詩だけを添えて参考を示すという体裁をとっていることであろう。これは参考までにというよりも、読者が訳詩を諷詠しながら、同時に原作の凝結した文字美を無言の視覚を通じて味わうという、まさしく日本人だけに許された両面鑑賞の愉楽を提供するものである。『鶯の卵』はその方式を一書として創始し、かつ確立したという点で、日本訳詩史の上で記念すべき詞華集と言わなければならない。（澤田瑞穂『鶯の卵』解説、筑摩叢書296『鶯の卵 新訳中国詩選』所収）

土岐善麿は明治18年6月8日、東京浅草、真宗大谷派の等光寺に、住職善静の次男として生まれた。等光寺は石川啄木の葬儀を営んだ寺として知られるが、それは善麿の啄木への友情によったもので、そのため境内には啄木記念碑が建っている。父は学僧として知られ、善麿は幼くしてこの父から学問と歌の手ほどきをうけて成長した。明治37年早稲田大学入学、同級に若山牧水がいた。明治41年早稲田大学英文科を卒業して読売新聞社に入社。明治43年、ローマ字歌集『NAKIWARAI』を自費出版し、それがきっかけで啄木と親交する。そしてわずか1年半の交遊で啄木の死にあう。啄木死後、彼を世に出すために尽力した友情は、短歌史上特記に値する。（冷水茂太『歌人土岐善麿小論』、冷水茂太『鑑賞土岐善麿の秀歌』短歌新聞社所収）

夜、はじめて訪ねて行きし わが友の、二階すまひの、冬の九時かな。

明治44年1月13日夜、善麿が石川啄木と初めて会ったときの歌で、わが友とは啄木である。啄木との交遊などを背景として、善麿の歌には社会主義的傾向が強くなってゆく。『六月』（昭和15年）は第二次大戦前夜における、日本の軍国路線に対する、激しい抵抗歌集である。この歌の持つヒューマンな感動は、長く歴史に残るであろう。



遺棄死体 数百といひ 数千といひ いのちをふたつも もちしものなし

歌集を次々と刊行する傍ら、善麿が大正十年代頃から今日まで、清忙生活の中で不即不離の間につづけてきた自修的作業ともいべき「漢詩和訳」、その成果が『鶯の卵』なのである。

土岐善麿の清新な訳詩、まず孟浩然の「春暁」はるあけぼのの うすねむり まくらにかよう とりのこえ

かぜまじりなる よべのあめ はなちりけんか にわもせに

次は、李白の「子夜呉歌」みやこのそらの つきさえて きぬたぞひびく いえごとに

ただふきしきる あきかぜの せきじにかよう うきおもい

いつかはあたを うちはてて かえるわがせ(夫)を むかえまし

そして柳宗元の「南澗中題」の後半、くにいでて ゆめもはるけく ひとこいてなみだうるおう

みはひとり しじのおもいに しばしこそよにもそむけば

わびしくも われやなになる たもとおりしるはわれのみ

あととめて きたるはたれぞ このころさをとときあれ

『鶯の卵』はしがきの中で、土岐善麿は「ウグイスの巣の中には、ホトトギスが、そのたまごを生むという。ウグイスは、それとも知らず一様にたまごを育てる。たまごがかえると、ウグイスの巣の中からホトトギスも飛びはなれてゆく。…この一冊にはホトトギスのでないウグイスのたまごが、いくつあるか、訳者は知らない。」と述べている。

かげやま たつや（教授・中国文学）